

親密な他者との自己開示と親離れとの関係

社会システム研究科
南星宝 2015M30006

要旨

通信技術が発達して現代社会では、多様なコミュニケーションメディアが自己開示する媒体として利用されている。それによって、現代の大学の青年にとって、親密な他者との自己開示も昔よりずいぶん変わった。いままでコミュニケーションメディアや人間関係に関する先行研究が多かったが、深い自己開示をする他者との親密性やコミュニケーションメディアが大学の青年期の親離れにどんな影響を与えるかについてはあまり検討されていない。

本論文は、大学生を研究対象として、青年期には、親密な他者つまり親や友人に対して、「直接」や「CMC」や「電話」この3つのコミュニケーションメディアを通じて深い自己開示をするとき、どのコミュニケーションメディアが親離れを促進するか。そして、親に深い自己開示と友人に深い自己開示すると、どちらが親離れを促進するか、それを検討することが本研究の目的である。

1 つ目の仮説は、大学時代の青年期は、親密な他者つまり親または友人に対して、「直接」や「CMC」や「電話」この3つのコミュニケーションメディアを通じて深い自己開示をするとき、直接深い自己開示をすると、親離れを最も促進する。

2 つ目の仮説は、大学時代の青年期は、友人との深い自己開示の方が親との深い自己開示より親ばなれを促進する。

方法は、まず、親と友人への自己開示の程度を測定した。「親」「友人」の2水準の関係と「直接」「CMC」「電話」の3水準のメディアの組み合わせで6タイプ(2×3)を設けた。さらに、小寺(2011)を参考にして、自己開示の話題を8水準(「恋愛についての相談をする」、「自分の恋愛観について語る」、「対人関係の悩みを相談する」、「将来(進路)について相談する」、「日常生活の不満を言う」、「自分の失敗談を話す」、「教員(上司)の評価や批評をする」、「知り合いの悪口を言う」)を選んだ。その8水準の話題は、前半4つが「深い自己開示」で。後半4つが「秘密と批評」である。それを組み合わせ、48項目を作成した。これは、コミュニケーションする媒体や相手との関係に影響を与えるか、どの程度行っているかを推察するように、CMCの利用は自己開示が親離れに影響を与えることを確認するためである。7件法(1; 全くない~7: 非常に多い)で回答を求めた。得点が高いほどその媒体をとおして自己開示する程度が高いことを示す。結果は、調査結果は、「関係性: 親・友人」に対するととき、「メディア: 直接」で自己開示する効果が一番高かった。このことから、大学の青年にとって、友人との親密度は親より高いと考えられる。

さらに、(2) 3 ページでは、「親から子への世代交代」尺度: 西平(1998)の尺度1、尺度2、尺度3、尺度4や尺度5を用いた。これは、大学の青年期の心理的離乳つまり親離れのどの段階かを把握するために、5つの下位尺度で分けて明確になるように測定した。尺度1は「親子の対立」である。尺度1の項目は、親との対立、親への反抗、親からの離反を示していることである。尺度2は「親への甘え」である。尺度2の項目は、親への依存、甘え、親からの離脱を抵抗、子供のままでいたい気持ちを示していると考えられることである。尺度3は「親への信頼感」である。尺度3の項目は、親への信頼、親の存在を肯定的に受け入れ、親との積極的同一化を示していると考えられることである。尺度4は「親から子への世代交代」である。尺度4の項目は、親の年齢的变化に伴う親子関係の変

化に関する意識、親を親としてだけではなく一人の人間として見つめていることが示されていると考えられる。尺度5は「親から仲間への離脱」である。尺度5の項目は、重要な他者が親から友人、仲間へと変わっていくことを示していることである。6件法（1：全然そうではない～6：全くその通り）で回答を求めた。得点の高いほど、各項目の程度が高いことを示す。調査結果は、大学時代の青年期は、親密な他者つまり親また友人に対して、直接深い自己開示すると、親離れを一番促進しなかった。そして、大学時代の青年期は、友人との深い自己開示のほうが親との深い自己開示より親ばなれを促進しなかった。

上述の調査結果によって、大学時代の青年期は、親密な他者つまり親また友人に対して、「直接」や「CMC」や「電話」という3つのコミュニケーションメディアを通じて深い自己開示をするとき、直接深い自己開示すると、親離れを一番促進しなかった。そして、大学時代の青年期は、友人との深い自己開示のほうが親との深い自己開示より親ばなれを促進しなかった。

しかし、「仮説1」や「仮説2」は完全に否定されるわけでもない。それは、現代社会の人間関係は昔の単一な関係性ではなくて、もっと多様になっている。多元な環境で育てる青年にとって、親離れより、自分自身を意識することが独立に与える影響はもっと深くなる。また、コミュニケーションメディアや相手との関係性は確かに対人関係の疎隔や親和に影響を与えるが、自分自身の意識つまりアイデンティティもお互いに深く影響を与える。それによって、青年の場面だけではなくて、親は子に対する変化、親のアイデンティティも重要な部分である。子離れできない親は青年期の子どもに対する、そういう状況でも青年の独立に影響を与える可能性もある。だが、本研究の結果によって、多様なメディアを通じて親密な他者との深い自己開示は親離れにある程度の影響を与えるが、それは単純な促進効果ではなかった。また、今回の研究では、性差、国籍そして父親や母親を別に調査しなかったため、これから、まだ検討する必要がある課題は多い。